



「笑顔のファシズム」

1980年代、アメリカではバートラム・グロスの『Friendly Fascism』（友好的全体主義）が話題となり、日本でも『笑顔のファシズム』という書名で邦訳が出ました。「全体主義や戦争は突然始まるのではなく、安心安全を求める人々の期待に応える形で権力者がそれまでの日常を少しずつ変えていって準備されていく」という分析は、トランプ政権誕生の際に改めて注目され、鋭い批評眼で知られるマイケル・ムーア監督は、「権力をコントロールする富豪に支配されるTVが『笑顔のファシズム』を進めている」と警鐘を鳴らしました。

プーチン戦争が続く中、「なぜプーチンの支持率が上がるのか？」と不思議に思いますが、「情報統制の結果である」という分析もあります。この状況は「戦前の日本とそっくりである」という論調もあります。80年前の日本で「戦争反対」を主張すれば、「非国民」「欧米のスパイ」とレッテルを貼られ、投獄されたりもしました。戦争に抗議する人たちがロシアにもいますが、彼／彼女らが逮捕されていく様子を見て「小林多喜二の拷問死を思い浮かべた」という声も聞きます。また、戦中の日本も今のロシアと同様に、権力者が言葉の意味を歪め、統制しました。その典型例は大本営発表の「転進」（「撤退、退却」を国民に知らせないため）です。このような言葉の恣意的な悪用を思うと、現在、与党の提案している「敵基地攻撃能力を反撃能力に変えたい」という主張も、国民を欺くための常套手段という感じがしてきます。



では、私たちの職場の民主主義は？

プーチン戦争を契機とする国際情勢の激変は、物価の値上がりや「与党による軍事費増額要求」といった形で我々の日常にも暗い影を落としています。そして、アメリカ、中国だけでなく、世界各地で進む全体主義の流れに日本も飲み込まれようとしている今（堤未果『デジタル・ファシズム 日本の資産と主権が消える』参照）、まずは自分たちの職場の民主主義（自由に意見が言える環境）を守りたいものです。

そこで、最近、組合本部に寄せられたちょっと気になる声を紹介します。

1、のべ500人以上にもなる非常勤講師に対する勤務条件の説明が不十分であった。

具体的には、「勤務日が当初の契約と違い、不利益を受けた」「校長（または事務長の）説明が短期間に二転三転した」という複数校の非常勤講師の方からの問い合わせと、「県教委の説明を求めたい」という声です。（この件に関しては、先月から本部役員を中心に県教委と交渉しています）

2、管理職が、できる人、頼みやすい人に仕事を一方的に押し付け、職場内での仕事量の差が激しい。

これも幾つかの学校から意見が寄せられました。中には「該当者が突然退職してしまった」という重大なケースもありました。（このため4月当初から職員が定数に足りていない学校があります）

3、年度末になっても現任校の勤務の継続が保障されず、非正規職員が大きな不安を感じている。

そのため、職場で重要な役割を果たしていた地公臨の方が、群馬よりも人事異動の発令の早い他県や私立の学校に就職してしまうケースがあり、4月になってもその補充ができず現場の混乱と疲弊度が増しています。もっと現場の声を聞いてくれれば、優秀な人を失うことを防げたはずです。

4、「部活指導」と称して訪れるOBが、顧問を攻撃したり生徒に不適切な言動をしたりしているのに、管理職が毅然と対応してくれない。

5、「年度末の業績評価に納得できない」という人に対して校長は評価を変える。

人によって校長の態度が変わってしまってもよいのか。（「管理職評価をして欲しい」という声もあります）

以上、管理職と県教委に対する意見が多く、職員や少数職種の声を組合としてしっかり受け止め、対処していく必要性を改めて感じています。

長時間過密労働を解消し、現場の切実な声を尊重できる職場にするために、

組合への加入をお願いします。群馬高教組のHP / <https://ghtu.org> こちらからもどうぞ ⇒



TEL : 027-231-2784 / FAX : 027-231-2787 / Email / ghtu@educas.jp